

## 札幌・東京会場

## ピウスツキとアイヌ文化

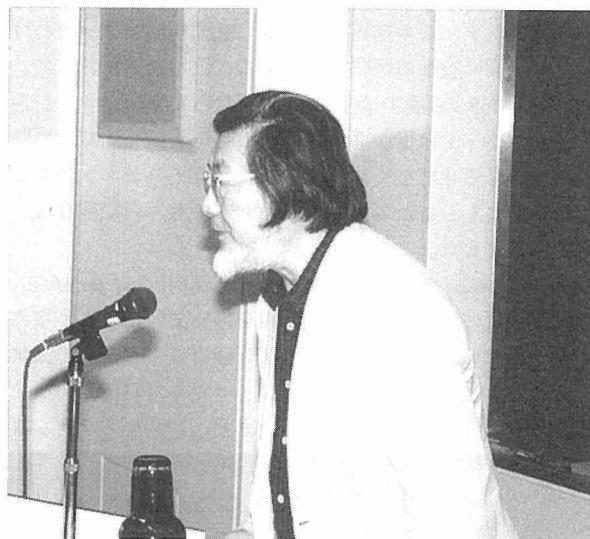
7月31日（木）15：10～16：40 札幌

8月21日（木）13：30～15：00 東京

講師

北海道大学スラブ研究センター教授

井上 紘一



本日は「ピウスツキとアイヌ文化」というテーマでお話しいたします。

私が掌握する限り、ピウスツキに関するNHK制作のTV番組が1984年から2000年にかけて5件放映されていますが、まずは1984年6月25日にNHK特集として公開された、最初の番組のごく一部を見ていただきます。ご覧になった方もおられるかと思いますが、余分な説明をするよりその方が、ピウスツキとはどういう人物か、どういう境遇のもとに生まれ育ったかということ、手っ取り早くご理解いただけたらと思います。

（ビデオ放映）

プロニスワフ・ピウスツキは1866年11月2日、ロシア帝国に編入されていたリトワニアの南東部に位置するズーフ（現ザラヴァス）で生まれました。1887年3月には、ペテルブルグでロシア皇帝暗殺未遂事件に連座して逮捕され、裁判を経て同年8月25日には既にサハリン（樺太）に到着しています。当初は強制労働に服すべき国事犯でしたが、97年2月には本来の刑期15年が恩赦で3分の2に減刑となって刑期満了、99年3月に大陸のウラヂヴォストクへ脱出することができました。しかし1902年から3年間は、かつての流刑地に再び舞い戻って、ロシア科学アカデミーの委嘱でサハリン原住民の調査に従事します。

1906年には日本、アメリカ合衆国、西ヨーロッパを經由して、同年9月、三国分割のもとでオーストリア統治下にあったポーランド（ガリツィヤ）に帰着します。だが、その後の人生も概して不遇で、故郷のリトワニアに帰ることも叶わず、ヨーロッパ各地を転々と流浪のすえ、1918年5月17日には、パリにて客死を遂げることになります。享年51歳でした。

本日の講義では、ピウスツキが1902年から1905年にかけてサハリン原住民の調査に従事する間に、アイヌ文化とど

のような関わりを持ったかということを中心にお話しします。

ピウスツキは従来、1912年の英文著作『アイヌの言語・フォークロア研究資料』の著者、すなわちアイヌ研究の先駆者としてはよく知られていました。けれども、ピウスツキがエディソン式蓄音機でアイヌのフォークロアを採録した蠟管が日本に到着し、北大を中心にその音声再生事業が推進された1980年代以降、とりわけICRAP（ピウスツキ業績復元評価国際委員会）の活動の一環として彼の業績が博搜された結果、ピウスツキはアイヌばかりでなく、サハリンのニヴフ（ギリヤーク）、ウルト（オロッコ）、さらにはアムール流域のナーナイ（ゴリド）、ウリチ（オルチャ）などの研究でも、大きな足跡を残していたことが判明しました。

しかし本講はピウスツキとアイヌ文化というテーマですので、以下の2点に話を限定します。まずは彼の「アイヌ識字学校」の実践を取りあげ、そのなかでアイヌの人たちとどのように接点を持ったかを追求します。次いで、彼が起草した「樺太アイヌ統治規定草案」を中心として、ピウスツキのアイヌ研究の特徴とその成果を検討する予定です。

ところで、彼が実践したアイヌ教育には、その前史がありました。

1887年晩夏、サハリン島に初めて上陸したピウスツキは、遅くとも93年にはニヴフの子供たちを相手にかなり本格的な教育を手懸けるとともに、ニヴフ文化の研究にも着手しています。そのなかでインディンという非常に聡明なニヴフの少年と出会うこととなります。ロシア語も算術も、乾いた砂が水を吸い取るように学ぶインディンを、ピウスツキは1899年早春にウラヂヴォストクへ移るときに連れて行きます。インディンは実科学校に入学しました。ゆくゆくはニヴフのもとへ戻して、最初の自前の教師にする心積もりだったのですが、少年はウラヂヴォストクの風土に馴染めず、1901年には肺結核を発病してしまいます。

1902年7月、ピウスツキがウラヂヴォストクからサハリ

ン調査に赴く際、インディアンも帯同しています。ピウスツキにはインディアンの結核養生という意図も無論あったわけですが、彼に教師の経験を積ませることも念頭にあって、実際にアイヌの「識字学校」で教鞭を執らせています。しかし、インディアンは僅か3ヶ月ほど教師を経験しただけで肺結核をこじらせて亡くなります。これはインディアンにもピウスツキにも、またニヴフ全体にとっても、大変残念なことでありました。

このようにピウスツキはサハリン調査に出かける前から、原住民教育についてある種の計画を抱いていたことが窺えます。とはいえ、ピウスツキの調査報告によると、樺太アイヌの識字教育を発想した端緒は、マウカ（真岡）のアイヌによって与えられたと記しています。1902年の7月、ま

ず最初に西海岸のマウカを訪ねたところ、当地のアイヌが日本語に堪能である事実に驚愕し、ロシア語を教えてもきつとうまくいく筈だと確信したそうです。そこで、サハリンの軍務知事に対して学校を開くよう、彼らに陳情させて、その陳情書はピウスツキ自身が執筆しています。これが効を奏して「識字学校」がマウカに開設となりますが、教鞭を執ったのはピウスツキの友人であるキリロフ医師でした。因みに、同医師はモスクワ大学医学部でチェーホフと机を並べて学んだ同窓生です。

ピウスツキは1902-5年の足掛け3年間、東海岸のアイヌのもとで「識字学校」を開設し、子供たちにロシア語と算術・算盤を教えました。これは子供らが家事から解放される

冬場に行ったもので、1902-3年にはシャンチャ（落合）、オタサン（小田寒）の2コタン、1903-4年はナイブチ（内淵）にそれぞれ設置することになります。1904-5年には日露戦争中にも拘らず、6コタンを巡回する訪問授業を組織します。こうしたピウスツキの努力は一定の成果を上げて、彼もまたアイヌ教育の有効性を確信しえたのですが、日露戦争におけるロシアの敗北で、すべては水泡に帰してしまいます。

1902-3年の冬に開設の「識字学校」では、シャンチャでインディアンが、またオタサンでは千徳太郎治がそれぞれに教師を務めます。インディアンは既述のように病に鞭打って授業を続けますが、その途中で「殉職」したわけです。彼の最大の功績は、自らが手解きしたトゥイチノが1904年には自分のコタン（シャンチャ）で識字教育の実践を始めたことでしょう。一方、千徳太郎治は1929年に『樺太アイヌ叢話』を著しているのですが、ご存知の方もいるかと思いますが、日本人を父に、そして樺太アイヌを母としてナイブチに生まれた「対雁アイヌ」です。「対雁アイヌ」とは、1875年の千島樺太交換条約の直後にアニワ湾の沿岸一帯から北海道へ移住した樺太アイヌで、北海道では石狩川河口の対雁に



Бронислав Пилсудский в айном традиционном хапате

Портрет написан литовским художником Адомасом Варнасом в 1912 г. в Закопане:

фотография картины хранится в Литовском художественном музее, Вильнюс.

*Bronislaw Pilsudski in an Ainu traditional robe*

Portrait drawn by Adomas Varnas, Lithuanian painter, in 1912 in Zakopane:

a photograph of the original painting is preserved in the Lithuanian Art Museum, Vilnius.

アイヌの伝統衣装をまとぶロニスワフ・ピウスツキ

リトワニア人画家アドマス・ヴェルナスの描く肖像画 1912年ザコパネにて

原画の写真はヴィルニユスのリトワニア芸術博物館蔵

最終的に落ち着くことになったため、そう呼ばれています。対雁では北海道アイヌに先立って初等教育が実践されたので、千徳太郎治は4年間通学して、日本語の読み書きを身につけた上でサハリンに戻りました。その直後にピウスツキと出会った千徳は、ロシア語がほとんどできませんでしたが、ピウスツキからロシア語の特訓を受けた結果、1903年の夏には、シェロシェフスキとピウスツキの北海道アイヌ調査に、通訳として同行できるまでになっています。このときの北海道アイヌ調査については、拙稿「B.ピウスツキと北海道：1903年のアイヌ調査を追跡する」をご参照ください。

1903-4年の冬、2年目の「識字学校」が東海岸のほぼ中央にあるナイブチに開設されます。インディンはすでに亡くなっていましたから、ピウスツキはやむなく千徳太郎治を助手として、自らが教鞭を執ることになりました。今回は、子供たちが寄宿舎に寝泊りをする形で授業を試みたこともあって、ロシア語の読み書きで長足の進歩が見られました。ところで、この年の「識字学校」で予期せぬ副産物が得られたことは、特筆に値します。生徒らがロシア語を学ぶうちに、キリル文字（ロシア語の字母）を使ってアイヌ語の文章を記すことが自然発生的に起きた、とピウスツキは述べています。これは生徒らの学習意欲を頗る高めることになったようで、冬場だけなのでさほど長い期間ではありませんが、毎日いろいろなテーマで作文を書いてはピウスツキのもとへ持っていったというのです。

その後日談として1905-6年には、日本に滞在中のピウスツキのもとへ、千徳太郎治からキリル文字で記したアイヌ語の手紙が少なくとも3通送られています。ピウスツキがどのような返事を書いたかは不明ですが、返書を受け取ったという記載が千徳の手紙には認められます。いわゆる文章語というのは本来、学者の作成する表記法に基づいて成立するものですが、ここでは話者自身のイニシアティブで「文章語」が自然発生的に出来上がっていった事実、そして千徳とピウスツキの間で手紙を交わすところまで、それが実際に使用された事実は、注目に値すると思います。但し、残念ながらこの「文章語」は、私の知る限り樺太アイヌのもとでその後に継承されることはありませんでした。キリル文字による「文章語」だったからだと思います。

2年目の「識字学校」が開かれていた冬、1904年2月には日露戦争が始まります。戦争の勃発に動揺した親たちが、「子供は家族と一緒にいるべきだ」「どうせ死ぬなら一緒に死にたい」と言って、次々に生徒を寄宿舎から引き取っていったため、この年の学校は若干早めに終了することを余儀なくされました。

3年目に当たる1904年から5年にかけての冬、戦争はまさに酣であったにも拘らず、ピウスツキは教育の実践を断念しませんでした。けれどもナイブチでは、前年に校舎兼寄宿舎として使った建物が軍隊に占拠されていて学校を開くにも場所がなく、アイヌの親たちも戦争中にあえて子供にロシア語を学ばせることは望まずで、学校の開設は遂に叶いませんでした。そこで案出されたのが訪問授業です。今回も教師を引き受けた千徳太郎治は、ローレ（呂礼）、

ナイブチ、アイ（相浜）、オタサン、セラロコ（白浦）を巡回して、生徒らが前年に習得した知識の復習に努めました。トゥイチノも地元のシヤンチャで訪問授業を行っています。

1905年になると、それまでは戦場となることを免れていたサハリンへも日本軍の上陸は必至という情勢で、住民の間にはいろいろな風説や流言が飛び交いました。樺太アイヌの人たちをとりわけ困惑させたのは、日本軍が上陸してきたら樺太アイヌは率先して協力するだろうという噂だったようです。そのような情勢のもとでロシア語を教えるというのは、頗る微妙かつ複雑な問題だったと思います。ピウスツキはこの状況を、アイヌの友人から「俺は息子をお前の所には遣らない。明日の命も分からぬのに、ロシア語を知っていようといまいと大差ないではないか」と、また別の友人には「ナイブチの子供らだけにロシア語を教えるということは非常にやばい。各コタンから一人ずつ男の子を集めて教えるべきだ」と言われたと記しています。一方では、ロシア語を覚えると、ロシア側で組織した「義勇兵」軍団に徴用されるという風説が流布していました。他方で当時は日本軍が優勢でしたので、ロシア語を学ぶと日本に占領された時に困るのではないかと、という懸念もあったのです。

なお、1905年に南サハリンが日本領南樺太となったのち、ナイブチにアイヌ教育所が開かれ、そこで千徳太郎治が教師を務めるようになるのは1912年のことでした。先にピウスツキのアイヌ教育の実践は、日露戦争によって水泡に帰したと申しましたが、より正確を期すとすれば、彼の遺志は千徳によって受け継がれたと言うべきでしょう。但し、千徳の著書『樺太アイヌ叢話』を繙いても、ピウスツキのことやその教育実践に対する言及は見当たりませんし、その間の事情はいまだ不分明です。千徳太郎治の同時代人に、山邊安之助という対雁アイヌがいました。彼は犬橈の専門家として1910-12年の白瀬南極探検隊に参加したことや、1913年刊行の『あいぬ物語』（1980年再刊）の著者としても著名です。トンナイチャ（富内）に暮らす山邊は、1903年以来ピウスツキと交流があり、インフォーマントとしてフォークロアを口述しています。1909年、彼は寄付を募ってアイヌ子弟のための学校をトンナイチャに建設しますが、これもやはりピウスツキの教育実践を継承するものと言えるでしょう。

次なるテーマは、1905年の3-4月にピウスツキが起草した「樺太アイヌ統治規定草案」です。これは歴史的にも極めて重要な労作ですが、その内容はつい最近まで不明でした。しかし今では、サハリン州郷土博物館のラティシェフ館長（当時）の尽力で、「草案」には「トムスク稿」「ウラヂヴォストク稿」という2稿の存在する事実が判明し、両稿とも同館長によって公刊されています。

1902年7月、マウカでの調査を終えたピウスツキは、8月初め函館へ来航して初来日を果たします。函館ではデンビー父子、森高夫妻と交遊した事実が判明していますが、アイヌとの出会いはなかったようです。9月10日、函館か

らコルサコフに戻ったピウスツキは13日まで、リャプノフ軍務知事に見会するためコルサコフに滞在します。彼はその際、調査への支援もさることながら、「アイヌ識字学校」への理解と協力を要請することも目論んでいました。会見の席でリャプノフ知事は、ピウスツキの要請をすべて快諾したあと、久しく知事の頭を痛めていたサハリン原住民統治規定の起草と、原住民の人口調査の実施を懇願するのです。「あなたを措いて、他に頼める人はいないのです」とまで言われたと、ピウスツキは伝えています。

そもそもピウスツキのサハリン調査は、ロシア科学アカデミー博物館のために樺太アイヌとウイльтаの民族資料を収集することが使命でしたが、統治規定起草と人口調査が加わったこととなります。1902-5年のサハリン滞在中、日露戦争とその前後の混乱にも拘らず、ピウスツキはいずれの課題も見事に遂行します。前者は、サンクト・ペテルブルグの人類学民族学博物館に世界最大かつ最良の樺太アイヌ・コレクションをもたらしました。また後者についても、1905年4月12日掲筆の「樺太アイヌ統治規定草案（ウラヂヴォストク稿）」（沿海地方国家歴史文書館蔵）がリャプノフ知事へ提出されています。いま一つの「トムスク稿」（トムスク大学図書館蔵）は、1905年3月の日付ですので初稿とも考えられますが、ピウスツキはそれを1912年頃まで手許に置いて推敲を加えていたと想定されるため、むしろ最終稿と見なすべきでしょう。両稿はいずれも28ヶ条から成り、条項も逐一符合しています。違いはといえば、「トムスク稿」は「ウラヂヴォストク稿」の4倍に達するという、ページ数の差に端的に表れています。つまり後者では、前者に満載されたアイヌ文化にかかわる詳細な解説が極力削ぎ落とされて、法文としての体裁が整えられており、その意味では、後者が前者の改訂版であることは一目瞭然です。

ここで統治規定草案の起草が求められた背景について、簡単に触れておきます。ロシア帝国では、1822年にスペランスキーが制定した「異族人統治法」が、20世紀初頭までほぼそのまま存続していました。とはいえ、古色蒼然たる同法はもはや実情に合わなくなっていたため、19世紀末には皇帝が再度にわたって改定を命ずる勅令を発しています。これを受けた内務省は、ハバロフスクのプリアムール総督府を通じてサハリン知事に対しても、サハリン州の改訂案を提出するよう命じていたわけです。

ところが「牢獄の島」サハリンにはこの業務をこなせる人材が見出せず、リャプノフ知事はペテルブルグとハバロフスクから発せられる矢のような催促に、頭を抱えこんでいました。まさにその時、ピウスツキがサハリンに姿を現わします。そこで知事は「藁をも掴む」思いで彼に泣きついたわけです。この「藁」は幸運なことに、世界広しといえども、知事がその希望を託した唯一の人材にほかなりませんでした。独学とはいえピウスツキは、サハリン原住民の研究に従事していた唯一の専門家であるばかりか、たとえ秋学期のみとはいえ、ペテルブルグ大学法学部に在籍して法律を学んだ経歴の持ち主でもあったのです。ラティシェフ館長は、ピウスツキが在籍した1886年度秋学期の法学部便覧

で当時の開講科目を参照しつつ、彼が立法業務に関してずぶの素人ではなかったであろうと推測しています。

では、ピウスツキ起草の「草案」の検討に移ります。その全体を貫く精神は、樺太アイヌの自治と自立を法的に担保することを通じて、伝統文化を維持しながら彼らの公民化を漸進的に図ることに求められます。

まず、自治の単位として、ロシア帝国で最小の地方行政区画である「郷（ヴォロスチ）」（日本の「行政村」や「大字」に相当）が、南サハリン（コルサコフ管区）を東西に2分する形で設定されます。つまり「郷」の範囲内において、アイヌが自立して生業活動を行い、伝統文化が維持できる方策を考えるというのです。なお、樺太アイヌが小規模なコタンに分かれて散居している実情に鑑みて、漁撈、狩猟といった伝統的生業活動に適した場所に集住して、大規模な行政村を設営する方向を提言しています。

次に、自治を担う行政組織は、当然ながら、軍務知事を頂点とするピラミッド構造の末端に位置づけられます。指揮系統は知事→異族人長官→郷長→助役→行政村長・書記と流れる上意下達ですが、最末端での行政村とその上位の郷において、レヴェルの異なる自治が保証されます。例えば、郷レヴェルの重要案件は、異族人長官、2郷長、4助役の都合7名（東西2郷を想定）で構成される「異族人評議会」において審議・決定されることとなります。ピウスツキ「草案」の独創的な部分は、帝国の農村地域に導入された農民長官に準えた、「異族人長官」の設定です。同長官は知事直属の行政官ですが、原住民に対する監督責任を有するため、彼らの言語を解する者を任命すべきとしています。なお、投票で選出される郷長や助役、行政村長は無給とするも、書記だけは有給の公務員とし、原住民からの採用が望ましいとコメントされています。

ここでは逐条的に検討する余裕がありませんので、興味深いトピックについて掻い摘んで紹介します。まずは納税と兵役ですが、サハリンの原住民はそれまで、いずれも免除されていました。シベリアの異族人全般に課されていたヤサーク（元来は毛皮で物納された人頭税）すら賦課されなかったのです。しかしながらピウスツキは、公民としての義務は応分に果たすべきとして、漁獲物販売益に対する直接税の賦課を提案しています。また兵役についても、諸般の事情から当面は免除が望ましいが、いずれは徴兵にも応ずべきであろうと述べて、北海道アイヌがすでに和人に伍して兵役に就いている事実にも（「トムスク稿」のみで）言及しています。28ヶ条中の2条は医療に関する規定ですが、各郷に一つ必ず診療所を設置し、アイヌに対して人道的に接する医師を常駐させることを提言しています。

教育問題では、既述の「識字学校」の実践を踏まえて、どのような学校を設置すべきかを巡って蘊蓄を傾けています。例えば、ロシア人入植者とアイヌが共住するナイブチには、ロシア人とアイヌの子弟が共学する学校の設置を提案しています。但し、ロシア語教育だけはアイヌ子弟のために別立ての授業を実施すべきとしています。したがって、もしこのような学校が実現していたら、ナイブチの住民はロシア語とアイヌ語のバイリンガルになることが期待できたで

しょう。

この当時は漁業権と狩猟権の確定、つまりアイヌが独自の利用できる漁場や猟場の確保が、喫緊の課題でした。かなり以前から日本人の漁業者は南サハリンの東西両海岸に漁場を持つようになり、1875年にサハリンがロシア領になってのちもそれは堅持されました。アイヌの人たちは日本人漁業者に雇用されて漁業に従事するようになったのです。しかも1902年頃には、刑期を終えてもサハリンに残留することを強いられた元服役囚の数が増えてきて、漁撈や狩猟にも従事するようになります。こうしてアイヌの伝統的な漁場や猟場は、日本人やロシア人によって大幅に蚕食されていったわけです。したがって、アイヌがこうした事態に対処するためにも、ピウスツキは先述のように「漁撈、狩猟といった伝統的生業活動に適した場所に集住して、大規模な行政村を設営」すべきことを提言したのです。つまり、このような行政村の域内に漁区や猟区を確保するとともに、入植者はアイヌの村の存在しない所に漁場を設定すべきことを謳っています。

ピウスツキの「草案」は、要するに、その後も世界の各地でさまざまに検討されてきた問題、すなわち原住民が近代国家に統合される際の戦略、換言するなら、原住民はどういう形で統合されるのが望ましいかとの問い、に対する一つの解答と言えるでしょう。1905年という執筆時期を勘案するなら、ピウスツキ「草案」は、自治・自立を前提としつつ、民主主義と人道主義に立脚する統治のあり方を、最も早い段階で提示したものと評価することができます。

「草案」(ウラヂヴォストク稿)がリャプノフ知事へ提出されたのは、1905年の4月12日以降ということになります。だが同年7月19日には、リャプノフ知事を司令官とする在サハリン・ロシア軍が日本軍に降伏していますので、もし知事が「草案」に目を通していたと仮定するならば、それ以降ではありえません。「ウラヂヴォストク稿」は、第二次大戦中に極東地方の公文書の疎開先となったトムスクの公文書館において、ラティシエフ館長が1980年代に発見しました。けれども今ではトムスクからウラヂヴォストクに戻っているため、「ウラヂヴォストク稿」と命名した次第です。ピウスツキは1902年9月に「草案」起草と人口調査の依頼を受けて以降、足掛け2年半を費やして両課題を遂行したわけです。「草案」には、アイヌの人口調査結果をまとめた報告書が添付されていましたが、ロシア軍の対日降伏によって、両文書が有効に活用され法制化される機会は永遠に喪われてしまいます。

ピウスツキは1906年にヨーロッパへ戻る途上、日本に7ヶ月ほど滞在しています。その間、二葉亭四迷、横山源之助(天涯)、上田将、大隈重信、宮崎民蔵・滔天兄弟、坪井正五郎、鳥居龍蔵など、多彩な日本人たちと交遊していましたが、その中で、アイヌ研究に関する最初の作品を日本において日本語で公刊することになります。1906年に「プロニラウ・ピルスドスキー」という氏名で、京華日報社の『世界』という雑誌の26-27号に連載された論文「樺太アイヌの状態」がそれですが、リャプノフ知事へ提出した人口調査報告書の抄訳にほかなりません。二葉亭四迷をしてそ

の人となりや「アイヌ救済を一生の大責任と心得て、東京まで出て来た。所が世間が餘りに冷淡なので大に憤慨して居たやうだ。・・・囊中?ば空しと言ふ有様で、衣服などは粗末で、食物などは何をも選ばぬ、生命さへ継げば、夫れで充分だ、ドウしてもアイヌの如き憐れむべき人種を保護しなければならぬと考へて居る」と形容せしめたピウスツキは、日本人のアイヌ研究者と会ったり交信の遣り取りをして、今や日本統治下に入った樺太アイヌの「救済」を訴えたのみならず、日本の読者に対しても同趣旨の呼びかけを試みたわけですから。因みに、人口調査報告書のロシア語原文の方は、1年後の1907年にウラヂヴォストクで刊行されました。

ピウスツキによるアイヌ研究の特徴とその成果を巡って、講義の総括に入ります。

まず第1の特徴として、ピウスツキのアイヌ研究は全くの偶然から始まったことが挙げられます。そもそも皇帝暗殺事件に巻き込まれなければ、彼は恐らく極東地方に来ることもなかったでしょう。したがって、アイヌと出会うこともなかったわけです。しかし、様々な偶然が重なる形で1896年、ピウスツキは南サハリンへ赴き、樺太アイヌの人たちとの付き合いが始まります。必ずしも明言されているわけではありませんが、ピウスツキは最初に手懸けたニヴフの言語や文化よりも、アイヌのそれの方を好んだというか、より親しいものと捉えていたように思われます。そういう個人の好みも介在したにせよ、とどのつまりは偶然の産物でした。しかも流刑囚としてサハリンに到着したわけですから、いろんな可能性がありえたとは申せませんが、民族学者になるという必然性は基本的にはなかったのです。しかし、たまさかの環境と出会いの中で、彼は独学で民族学を専攻する道を選びます。当初はニヴフのもとでこの学問を始めますが、やがて、とりわけ1902年以降は、樺太アイヌの研究に傾倒して行きます。

第2の特徴は、本人の持つ生まれつきの心優しい性格です。これについてはいろいろな人がいろんな所で、特に年子の実弟で「ポーランド国家再建の父」と称されたユゼフ・ピウスツキとの対比において、プロニスワフは非常に心優しい人物であったと証言しています。この心優しさは必然的に、当時の若者の心を捉えた社会主義、人道主義の思潮にピウスツキを接近させます。しかし、これらは不運にも、帝国内に澎湃として起きていた反体制運動の思潮でしたから、彼の人生はそうした流れの中で形作られるのでした。これは時代の特色と言えるかも知れません。

このような性格は、至る所で付き合いようになつた原住民から、民族学者にとっては不可欠である「全幅の信頼」が寄せられたという成果をもたらします。そればかりか、自分たちの支配者や王様になってくれという言い方で尊敬を集めるようなこともありました。1906年にピウスツキとかなり親しく付き合った二葉亭が、その人となりについて語った箇所は先に引用しましたが、彼には頗る子供じみたところがあって、懐に一銭もないのに、アイヌを救うために何かしなくちゃならない、アイヌを救うことが自分の使命だ、

とまで言い張る変な奴だ、と満腔の愛情を込めて表現しています。

第3の特徴ですが、その当時としては最新の科学技術の活用が挙げられます。ピウスツキはカメラとエディソン式蝋管蓄音器を携えてフィールドワークを実施しますが、その成果は画期的なものでした。まず、彼がサハリンで撮影した写真は、当時の出版物にかなり頻繁に使用されている事実が、最近の調査で判明しています。全部を併せると、恐らく100点は優に超すでしょう。このような写真は、カメラを持っていなければありえなかったわけです。あるいは、たまたまカメラが使える時代に際会し、その近代技術活用の才に長けていたと言ってよいのかも知れません。カメラに劣らず大きな成果を上げたのは蝋管蓄音機です。ピウスツキ採録の蝋管は恐らく数百本あったと思われるが、1980年代半ばに北大がポーランドのポズナン大学からその所蔵蝋管を借用した際には、僅かに64本しかありませんでした。とはいえピウスツキ採録蝋管は依然として、例えばサンクト・ペテルブルグで、発見されることが期待できます。ところで64本の録音蝋管は、国際的な研究組織ICRAPを発足させ、日本の最新技術を駆使して音声が生産されたことで、ピウスツキ研究を学際的に推進する原動力となりました。それだけでなく、これらの蝋管に収録された樺太アイヌならびに北海道アイヌの音声は、録音されたアイヌの肉声としては最古のものと言って宜しいかと思えます。

第4の特徴的なスタンスとして、原住民の民族としての自助自立自治の重視を落とすわけには行きません。それは「樺太アイヌ統治規定草案」の中にも脈々と流れています。

第5の特徴は、教育をとりわけて重視したということです。近代国家の一員となるには、どうしても基本的教育は避けて通れないわけです。そのために、どのような教育制度を設けるべきかを巡って思索を重ねる際に、机上の空論ではなく、「識字学校」の実践を踏まえつつ、施策を練り上げている点が高く評価されます。

言語研究が第6の特徴です。この点については詳しく申し上げる余裕がありませんが、当時の民族学研究は、まず言語の研究から着手せざるをえない状況でした。したがって、ピウスツキはアイヌ研究でもニヅフ研究でも、同じように言語の習得から手懸けています。代表的な関連著作としては、ポーランドで1912年に刊行された『アイヌの言語・フォークロア研究資料』があります。同書はアイヌ語を正確無比に記録した傑作として、今なお多くのアイヌ研究者が座右の銘にしています。またウイльта語、ウリチ語、ナーナイ語に関しても優れた研究成果が残されていて、編集作業が進行中の『ピウスツキ著作集』に順次収録されることになっています。

第7の特徴として、卓越した民族誌の叙述が挙げられます。既述のように、最新技術の粋をその非常に早い段階で導入し、しかも研究の対象となる人たちの信頼も確保しながら研究を進めた事実もさることながら、ピウスツキに独特の観察力、洞察力、言説も特筆に価します。例えば、1909-14年に露独・ポーランド語で発表された樺太アイヌの熊祭りに関する一連の論文は、アイヌの熊送りの叙述とし

てはきわめて異色な作品です。というのも、儀式の現場のあらゆる場面に立ち会えるという自らの立場を生かしつつ、あたかも記録映画をとるが如くに様々な視座から観察した結果を、彼は臨場感に溢れる筆致で叙述しているからです。

第8の特徴は、ピウスツキが樺太アイヌの女性と結婚し、一男一女をもうけたという事実です。しかし、ピウスツキがサハリンと訣別した1905年には妻子を連れて行くことが叶わず、家族はサハリンに残留となりました。アイヌ妻はその後にサハリンで亡くなりますが、長男長女は戦後北海道に移住して、現在は孫と曾孫の方々の世代が日本に在住しておられます。したがって、ブロニスワフ・ピウスツキに関する限り、その子孫はすべて日本に住んでいます。ブロニスワフの兄弟姉妹はヨーロッパの各地に分散していますが、ユゼフには娘が二人居ただけですので、直系曾孫の木村和保氏(長男助造氏長男)は、ピウスツキ家唯一の男系子孫として横浜に在住しておられます。

最後に、特徴の第9として挙げざるをえないのは、1904-05年の日露戦争がピウスツキの活動を徹頭徹尾妨害したという事実です。日露戦争が起きたためいろんなことができなくなり、あるいは戦争によってその方向が変えられてしまいました。いずれにせよ、日露戦争なかりせば、もっと違った展開がありえたと想定されます。例えば「統治規定草案」は、もしこれが実際に成案となって施行されていたならば、そしてまた後続したロシア革命が、もしもすぐには起こらなかったとすれば、樺太アイヌには違った歴史があった筈です。その意味で、日露戦争による頓挫は頗る残念であります。

以上、簡単ですがピウスツキのアイヌ研究について、その特徴と成果をお話いたしました。

## 参考資料

### I. ピウスツキの著作

- 1906-ブロニラウ・ピルスドスキー(ママ)「樺太アイヌの状態」(上下、上田将訳)『世界』26号57-66頁; 27号42-49頁、東京・京華日報社
- 1912-*Materials for the Study of Ainu Language and Folklore*. Cracow: The Imperial Academy of Sciences, "Spolka Wydawnicza Polska".  
邦訳: 和田文次郎抄訳「樺太アイヌに伝わる昔話」『北方日本』15/2 100-107頁、1943; 知里真志保抄訳「樺太アイヌの説話」『樺太庁博物館彙報』3/1 1944 [『知里真志保著作集』1巻(平凡社、1977)、251-372頁に再録]; 北海道ウタリ協会札幌支部アイヌ語勉強会全訳「樺太アイヌの言語と民話についての研究資料」『創造の世界』46-84号、1873-1992.
- 1998-*The Aborigines of Sakhalin* (A.F. Majewicz, ed., *The Collected Works of Bronislaw Pilsudski* vol. 1). Berlin & New York: Mouton de Gruyter.
- 1998-*Materials for the Study of Ainu Language and*



*Folklore (Cracow 1912)* (A.F. Majewicz, ed., *The Collected Works of Bronislaw Pilsudski* vol. 2). Berlin & New York: Mouton de Gruyter.

- 1999-和田完訳「サハリン・アイヌの熊祭」和田完編著『サハリン・アイヌの熊祭—ピウスツキの論文を中心に』3-45頁、第一書房
- 1999-和田完訳「サハリン・アイヌのシャーマニズム」和田完編著『サハリン・アイヌの熊祭—ピウスツキの論文を中心に』47-73頁、第一書房
- 2000-荻原眞子訳「B.ピウスツキのサハリン紀行」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』6号、219-240頁

## II. ピウスツキに関する著作

- 1972-木村毅『五人の革命家』講談社（再版『日本にきた五人の革命家』恒文社、1979）
- 1987-先川信一郎『ロウ管の歌—ある樺太流刑者の足跡』（道新新書）
- 1999-K. Inoue, "Dear Father!": *A Collection of B. Pilsudski's Letters to His Family, et alii (Pilsudskiana de Sapporo no. 1)*. Sapporo: Slavic Research Center of Hokkaido University.
- 2001-荻原眞子/丹菊逸治「千徳太郎治のピウスツキ宛書簡」『千葉大学・ユーラシア言語文化論集』4号187-226頁所収
- 2002-佐藤忠悦『白瀬南極探検隊と2人の樺太アイヌ—探検への道程とその後の人生—』秋田活版印刷
- 2002-K. Inoue, *B. Pilsudski in the Russian Far East: From the State Historical Archive of Vladivostok (Pilsudskiana de Sapporo no. 2)*. Sapporo: Slavic Research Center of Hokkaido University.
- 2002-ヴラヂスラフ・M・ラティシェフ、井上紘一編『樺太アイヌの民具』北海道出版企画センター
- 2002-樺太アイヌ協会編『樺太アイヌの伝統文化—ピウスツキ・コレクションより—』北海道出版企画センター
- 2002-井上紘一「プロニスワフ・ピウスツキ」樺太アイヌ協会編『樺太アイヌの伝統文化』107-113頁所収
- 2002-井上紘一「プロニスワフ・ピウスツキの不本意な旅路」樺太アイヌ協会編『樺太アイヌの伝統文化』114-130頁所収
- 2003-井上紘一編『ピウスツキによる極東先住民研究の全体像を求めて』北海道大学スラブ研究センター
- 2003-井上紘一「B.ピウスツキと北海道：1903年のアイヌ調査を追跡する」井上編『ピウスツキによる極東先住民研究の全体像を求めて』11-31頁所収
- 2003-Koichi Inoue, "B. Pilsudski's Proposals of Autonomy and Education for the Sakhalin Ainu," 井上編『ピウスツキによる極東先住民研究の全体像を求めて』49-74頁所収
- 2003-Koichi Inoue, "Dear Father" —B. Pilsudski's Letters from the Petro-Pavlovsky Fortress," 井

上編『ピウスツキによる極東先住民研究の全体像を求めて』173-88頁所収

- 2003-Koichi Inoue, "Franz Boas and An 'Unfinished' Jesup Research on Sakhalin Island," *Contributions to Circumpolar Anthropology* 4 pp. 135-163. Washington D.C.: Arctic Studies Center, National Museum of Natural History, Smithsonian Institution.
- 2003-Kazuhiko Sawada, "Bronislaw Pilsudski and Futabatei Shimei," 井上編『ピウスツキによる極東先住民研究の全体像を求めて』107-116頁所収
- 2003-沢田和彦「プロニスワフ・ピウスツキ日本暦」井上編『ピウスツキによる極東先住民研究の全体像を求めて』145-172頁所収[URL:<http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/inoue/top.htm> においてインターネット公開中]
- 2003-百瀬響「日本のアイヌ政策から見る『樺太アイヌ統治法案』—近代化政策の評価をめぐる—」井上編『ピウスツキによる極東先住民研究の全体像を求めて』33-47頁所収
- 2003-田村将人「樺太アイヌ教育の黎明期（1）—千徳太郎治と山辺安之助の動きを中心に—」*itahcara* 創刊号 47頁所収

## III. ピウスツキに関するTV番組放映記録

- 1984年6月25日、NHK特集「ユーカラ沈黙の80年—樺太アイヌろう管秘話」（山岸嵩制作）  
[1987年NHKサービスセンター制作の「NHKビデオ」カセット「樺太アイヌろう管秘話」として市販されている]
- 1985年10月14日、NHK/ETV 8「樺太アイヌ望郷の声」（山岸嵩制作）
- 1991年11月28日、NHK/日ソ・スペシャル「樺太アイヌ—失われた子守歌—」（大野兼司制作）
- 1996年11月6日、NHK特集「世界が見つめたアイヌ文化 第2回ロシア篇、流刑囚の遺産」（大野兼司制作）
- 2000年12月17日、NHK日曜スペシャル「絆は100年を越えて—家族が結ぶ日本とポーランド—」（NHK・フリー映像プロダクション共同制作）

